竹中　宏子　　*TAKENAKA Hiroko*

《村上公子先生退職記念　送る言葉》

村上公子先生との思い出

Memories of Professor Murakami Kimiko

村上公子先生は、富山国際大学から2001年４月に早稲田大学人間科学部に教授としてご就任され、2022年３月にご退職されました。私が同じ学部の教員になったのは2006年４月。どこか抜けていて危なっかしい私を憂いてか、その時からご退職まで、村上先生には常に見守られていた気がします。実は村上先生の研究室はお隣で、2012年までは演習室も共有させていただいておりました。長きにわたり、村上先生が隣の研究室にいらっしゃるのが当たり前だったので、2022年秋の現在でも、未だいらっしゃるものと錯覚してしまいます。

人間科学部での村上先生は私にとって、常に頼りになる大先輩でした。先生はドイツ語科目を、私はスペイン語科目をコーディネイトする立場であることから、語学教育での悩みはまず、村上先生に相談しましたし、思い付きレベルの提案であっても、即、村上先生にお話ししました。今思えば、研究室が隣だからと言って、お忙しい先生を随分気軽に捕まえたものだと反省しています。学部内の外国語教育検討委員会では、委員長を２期（2014～16年／2018～20年）務められ、様々な問題を解決されました。その他にも、学生委員会委員長（2016～2018年）、および人間環境科学科の学科主任（2010～2012年）を務められ、学部・学科の運営にも大いに貢献されました。そういった場面での村上先生は、常に冷静で、極めて合理的なご判断を下される印象でした。

しかし、村上先生のお部屋や私たちの研究室が並ぶ「８階の廊下」では、少し異なる先生のお姿に触れられました。先生の研究室には本や文具が並ぶだけではなく、ふとした所にトトロやモンチッチがいるのです。可愛いキャラクタ

ーそのものにも癒されましたが、そういった村上先生の柔らかい部分にも癒されました。８階の廊下では立ち話をすることも度々で、時にこんなエピソードがありました。ある時、先生がずっと立ち止まって窓の外を見ていらっしゃるので、火事でもあったのかと私が尋ねると、「夕日がきれいなのよ」とおっしゃるのです。どんな時や場所でも発揮される村上先生の豊かな感性の前に、貧弱な私の想像力を恥ずかしく感じながら、一緒に夕日を見つめていたことを覚えています。そこに、もう一つお隣の中国語の先生も加わって、３人で狭山丘陵に夕日が沈むのをしばし眺めていたあの時が、昨日のことのようです。また、私の研究室前に、村上先生からの贈り物としてレンズ豆が置かれていたことがありました。それは、当時妊婦であった私が鉄分不足で、「スペインでよく食べるレンズ豆があれば、嫌いなレバーを食べずに鉄分が採れるのに」とぼやいたからでしょう。その時は何もおっしゃらずに会話は終わり、数日後に、私のためにレンズ豆を見つけてきてくださったのです。村上先生のお陰で快適な妊婦期間を過ごせたことを記憶しています。さらに、村上先生は時々、和服で会議にご出席されることは有名で、ほぼ「学部の名物」のようになっておりました。優しさやお心遣いのみならず、優雅で品位も兼ね備えた方でした。

心温まるエピソードは多々あるのですが、研究での接点はあまりありませんでした。村上先生が、2004～2006年度に人間科学学術院内のプロジェクト研究「危機と人間」の研究代表者として共同研究を主導されたことは、聞き及んでいます。個人的には唯一、2015年度に人間総合研究センターの研究プロジェクト（Ａプロ：「人間の移動と定住に関する歴史人類学的研究」）でご一緒させていただき、同年７月に長崎県島原市にて共同調査させていただいたことがありました。私たちは「ジェンダー班」で、主に「唐行きさん」について調べたのですが、私の運転で唐行きさんやキリシタンゆかりの寺院を訪ねながら資料収集し、地元の郷土史家からお話を聞いたり、お食事をしながら調査のまとめを議論したり、大浴場に入りながら先生の「自分史」の一部をうかがったりしたことは、何より印象深く、楽しい思い出として心に残っています。

他にも村上先生との思い出はたくさんあり、それなのに既にご退職されたことを思うと、寂しくて仕方ありません。コロナ禍でのご退職ということもあり、ご退職祝いの会席はペンディングのままです。その日には、学部の一員として、そして「後輩」として、心からの感謝の気持ちを伝えるつもりです。